

バルトン先生来日経路の疑問

稲場紀久雄

稲場でございます。バルトン先生来日経路の疑問ということ、三十分程お話をさせていただきます。

バルトン先生は、お配りしましたプリントにもございますけれども、一八八七年の四月六日にロンドンを発たれまして、インド洋経由で五月二十日頃に横浜に着かれたものというふうに思っていたわけでございます。

ちょうどその頃は、マルセイユから横浜まで、海路で四十日程かかったわけです。四月六日に発たれまして、それから到着したのが、仮に五月二十六日とします。これはバルトン先生が東京大学の教員ということで採用された日、雇用が始まった日です。この四月六日から五月二十六日までの間というと、

ちょうど五十一日あるわけです。したがってロンドンを発って、パリで少し遊んで、それからマルセイユを経て日本にやってきますと、まあだいたい五十日弱ぐらいです。

先程言いました四十日ということを前提にして考えますと、日程も比較的ゆったりしたものだし、それからそもそも当時はインド洋経由でやってくるのが一般ではないか。日本人もヨーロッパに行くのには、多くの人達が、インド洋経由で行ったと、そのように思い込んでいたものですから、私も、だいたい無理がない日程で、インド洋経由で来れるなどというように思いました。ですからたぶんバルトン先生もそういった経路で日本にいらっしまったんじゃない



いかと、こんなふうに使っていたわけです。
そんなわけで、『都市の医師』にも、これは敢えて言いますが、小説というふうに使っているんですけれども、たぶんインド洋経由で来られたのだろうと推測ができると書いたわけです。

ところがそれを書きましたときに、正直言いました、若干ほんとかなという、自分の書いたことをそういうのもなんですが、若干自分としては疑問もなければなかったんです。なぜかと言いますと、ちょっとプリントにも書いておきましたが、先生の著書である『都市の給水』という本の序文にこんなことが書いてあるわけです。「スペイン人に征服されるまでのメキシコやペルーの水道施設は、ヨーロッパのものよりはるかに優れていた。」と。メキシコとかペルーと言えば南米です。なぜそんなことが書いてあるのかなと、ちょっと引っ掛かりがあったんですね。なんとなく文章の調子ですと、自分の目で見たというような感じが、想像できないわけではない。

それからそもそもバルトン先生という方は、人から又聞きで聞いたこと、現地に行つて見ないようなこと、あるいは本に書いてあるそのまゝのことを、ひき写して書かれるという、そういう方じゃないというように、私は思うわけです。そんなことからして、やっぱり行かれたのかな。南米に行かれるとなると、じゃあいつ行かれるんだろうと思ひますと、これはもちろんわかりません。

ひょっとしたら、南米と言ひますか、アメリカ經由かなと、引つ掛かりもあつたんです。あつたんですけれども、先程言ひましたような理由で、やっぱり一般的と私が信ずるほうを採ろうとしたわけです。そして南米のほうに行かれたのも、なにかの機会に、といつても、そんな機会が当時そうあるわけじゃありません。しかも南米なんていうような、当時としても特殊な地域でしょうし、今だつて必ずしも日本人の場合でも行けるところじゃありませんが、ともかくなにかの機会に行かれたんじゃないかな。取りあへずそう考へておこうということで、インド洋経

由で来られたに違ひないというように推測したんです。

ところが「都市の医師」が生まれてから、横浜開港資料館の堀勇良さんから、一つの資料が送られてまいりました。それがジャパン・ウィークリー・メーイルという、横浜の居留地をベースに明治の非常に早い時期から出ている新聞です。この新聞に「こんなことが書いてあるよ。」といつて送つてこられたんです。これはバルトン先生が太平洋經由で来たという決定的資料なんです。

ちよつとここに四角で囲つたところがありますね。左のほうを見ていただきますと、これは日本の横浜に入港した船の名前がずつと書いてあるんですね。シティー・オブ・シドニー、アメリカン・ストリーマーなんて書いてあります。たぶん千九百六十五トンのいう大きな船だと思ふんですけれども、サンフランシスコを五月五日に出航しまして、五月二十六日に横浜に入港した。メイルズ・アンド・ジェネラルというところで、郵便物と一般貨物を一緒に積載

LATEST SHIPPING.

ARRIVALS.

Constance (14), corvette, Captain S. H. P. Acres, 21st May.—Kobe 18th May.
Norden, Danish steamer, 762, Davidson, 22nd May.—Takao 17th May, 21,000 bags Sugar.—Jardine, Matheson & Co.
Nagaya Maru, Japanese steamer, 1,262, Wilson Walker, 25th May.—Yokkaichi 24th May, General.—Nippon Yusen Kaisha.
Omi Maru, Japanese steamer, 1,525, Swain, 25th May.—Kobe 24th May, General.—Nippon Yusen Kaisha.
City of Sydney, American steamer, 1,965, D. E. Friele, 26th May.—San Francisco 5th May, Mails and General.—P.M. S.S. Co.
General Werder, German steamer, 1,800, Von Schluckmann, 26th May.—Hongkong 20th May, General.—H. Ahrens & Co. Nachf.
Hioo Maru, Japanese steamer, 896, C. Nye, 26th May.—Niigata 22nd May, General.—Nippon Yusen Kaisha.

Kutakage, K. Machida, Y. Kajita, H. Tanaka, S. Nanuma, A. Machimoto, and K. Kogaki in second class; and 115 passengers in steerage.

Per American steamer *City of Sydney*, from San Francisco.—Mrs. H. C. Gearing and two children, Miss L. Chamberlain, Captain McNair, U.S.N., Captain G. Young, Rev. Alex. Hardie, Messrs. W. K. Burton and Clarence E. Caldwell in cabin.

Per German steamer *General Werder*, from Hongkong.—Mr. and Mrs. Fietze, Miss Brown, Miss Field, Messrs. M. Paquin, Muralbard, and Ah Kue in cabin; and 13 Chinese in steerage.

Per British steamer *Abyssinia*, from Hongkong via Kobe.—Mr. and Mrs. Greeley, Mr. and Mrs. MacLean, Masters MacLean (2), Miss Stark, Mrs. Marshall, Mrs. Wharrie, Messrs. Fraser, Elerton, Moffat, Pearson, and May in cabin.

Per Japanese steamer *Satsuma Maru*, from Shanghai via ports.—Dr. and Mrs. H. W. Boone and two children, Mrs. H. D. James, Messrs. H. Blum, Takayanagi, Yamashita, Kamada, Yamagishi, and Miyaguchi in cabin; Mr. and Mrs. Ozaki, Miss Ozaki, Miss Nishiyama, Messrs. T. Takayanagi, Motoshina, Sugiyama, and Nishigawa and child in second class; and 104 passengers in

LATEST COMMERCIAL.

IMPORTS.

There has been a strong demand for Yarns during the week, and a further advance has been established in 28/32s and two-folds, whilst other counts, as well as Bombays, have all been firmer. Grey Goods and Fancy Cottons have been quoted firm without much business being done, and dealers will not pay the prices required for most descriptions of Woollens, which checks business in these Goods.

YARNS.—Sales for the week amount to 800 bales English and 300 bales Bombay; quotations are all higher and the market is firm.

COTTON PIECES GOODS.—Sales are reported of 300 pieces Velvet, 700 pieces Turkey Reds, 2,000 pieces Indigo Shittings, 1,000 pieces Victoria Lawns, and 500 pieces Prints.

WOOLLENS.—800 pieces Italians and 500 pieces Mousseline de Laine, in addition to 120 pieces Cloth have been the sales reported.

COTTON YARNS.

Nos. 16/24, Ordinary \$46.50 to 28.25

PASSENGERS.

ARRIVED.

Per British steamer *Belgie*, from Hongkong.—Mr. J. H. Costa in cabin. For San Francisco: Mr. H. Foss in cabin.
 Per Japanese steamer *Omi Maru*, from Kobe:—Mrs. J. Thomas, Surgeon-Major McConnell, Surgeon-Major J. Reid, Dr. Owen, Mr. and Mrs. Yashiba, T. A. Singleton, M. Nagayama, T. Itagishi, S. Ishiyama, O. and T. Inikida, B. Ichida, H. Nakagawa, S. Gotô, S. Yamanouchi, and T. Hagiwara in cabin; Mrs. Satô, Messrs. M.

May, at 4 a.m.

The Japanese steamer *Satsuma Maru* reports:—Left Shanghai the 21st May, at 11 a.m.; had light S.W. winds and clear weather to Nagasaki, where arrived the 23rd, at 3.40 a.m. and left the same day, at 6 p.m.; had fresh westerly winds and clear weather to Shimonoseki, where arrived the 24th, at 6.48 a.m. and left the same day, at 7.42 a.m.; had light variable winds and pleasant weather to Kobe, where arrived the 25th, at 5.18 a.m. and left the same day, at 6 p.m.; had light S.E. winds and heavy swell to Yokohama, where arrived the 27th May, at 1.30 a.m.

just now; for in spite of rather cold weather, the crops appear to be going fairly well. The outlook for the manufacturing interest in Europe and America is reported good; but with new crops at hand, consumers do not lay in more Raw material than is absolutely necessary.

Quotations here cannot be altered. In fact, dealers have succeeded in obtaining very good prices for the few parcels they are moving from time to time. The aspect of holders is generally strong, and they seem determined not to throw away anything so long as they can hold on to the stock.

した船だと思うんです。

この船だけだったら別に驚くことはいんですけれども、この真ん中のところの上の四角ですね。シティー・オブ・シドニー号に到着した船客の名前が書いてあるんです。よく堀さんもここまで見たものだと思いますが、この四角の一番最後にW・K・バルトンと書いてありますね。ですからこれによりまして、明らかにバルトン先生は、サンフランシスコを経由して太平洋を横断して、五月二十六日に横浜に上陸したということがわかったわけです。これは揺るぎない事実だと思います。そして五月二十六日、上陸したその日から、日本政府はバルトン先生を正式に東京大学の教員として採用した。こういうことになるわけですね。

そんなわけで、ここに先生が来日されました経路の一部が明らかになったということで、私の『都市の医師』も、部分的修正に迫られることになったわけでございます。歴史というものは、小説家によりまして、大いに歪められる事実もございます。そう

いう意味でこれも一つの例であるというように思います。でもこういうことからまた、正しい事実がわかって行く。そして次第次第に、本当の正しい真実に迫って行くということでございます。小さな事実かもしれないけれども、これがわかったということも、非常にありがたいことだなというように思っているわけでございます。

ただ先程の事実から、いろいろ興味深いことがまた推測されるわけでございます。今日はそういったことをもうちょっとお話をしたいと思えます。

なお、バルトン先生については、わからないことがたくさんございます。これをほんとの意味で明らかにしていくのには、やっぱりバルトン先生の生地でありますスコットランドのエジンバラ、あるいはバルトン先生のお父さんの生地であるアバディーンというような所に出掛けて、そしてほんとに向こうの遺族の方々にお目にかかって、いろんな状況を調べるといふようなことが必要かと思えます。そんなわけで、いつか将来、じっくり時間をかけましてそ

ういったことを調べ、そして私はまた先生を主人公にした小説を書いてみたいというような、これは夢なんですけど、そんな夢を持つわけでございます。

じゃあ先程の事実でどんなことがわかるんだらうということですが、五月五日にサンフランシスコを出航し、日本に着いたのが二十六日ということ、太平洋を横断するのに二十一日間を要しているわけです。ロンドンを出てサンフランシスコに着くまで、トータル五十一日から二十一日を差引きますと、三十日ということになるわけです。ところがどうも私の判断としますと、三十日も二十一日も、いずれもちょっと期間が長いなという感じがするんです。

なぜそういうふう考えたかと言いますと、先生が日本に来られる途中で、メキシコやペルーに立ち寄られたんじゃないかという仮説を立てまして、この来日過程で、メキシコやペルーに行けたらどうかということを検討してみたいというように思うんですね。そういう意識で先程の二十一日、三十日というのを見ますと、ちょっと期間が長いなというよう

に思うんですね。つまり行けた可能性もないわけじゃないというようにまず思うわけです。

それじゃあ、当時大西洋を横断し、アメリカ大陸を横断し、太平洋を横断するのに何日ぐらいかかったんだらう。実はこれがよくわかりませんね。なかなかそういうことを書いてある本がないんです。ところが当時、日本人でペルーまで行った人として非常に有名な人が一人いるわけです。それは皆さんもご承知の高橋是清です。大蔵大臣をやり、二・二六事件の際に暗殺された人ですね。この高橋是清は、若いときにペルーの銀山開発に出掛けているわけです。しかも日露戦争のときにも、ヨーロッパまで出掛けて、向こうで戦費調達の外債を募るというような仕事もやっているわけです。当時世界を駆け回った人の一人じゃないかと思えます。

この方は、きっちとした、非常に名著と言われる、『高橋是清自伝』というものを残しているわけです。この『高橋是清自伝』を紐解いてみますと、まず明治十九年にヨーロッパに行かれています、このと

きはロンドン・ニューヨーク間で、十日間かかっているわけです。それからアメリカ横断は鉄道が敷かれていました。その鉄道に乗って行きますと、明治二十二年ですけれども、だいたい六日です。それから太平洋横断。これは横浜からサンフランシスコですけれども、明治十八年で、十五日かかっているわけです。

バルトン先生がこられたのは明治二十年です。ですからだいたい似たような時期ですね。同じような船に乗ったと考えまして、先生がロンドンからサンフランシスコに直行したとしますと、十六日で来れるわけです。ところが三十日かかっているんですから、差額十四日というのが出て参ります。どういうようにこの十四日を過ごされたんだろう。こういうことが問題になるんです。当時は十四日でサンフランシスコから南米のどのあたりまで行けるんだろう。実は、高橋是清がサンフランシスコからペルーのリマまで行くのに、三十日かかっているんですね。ですからペルーのリマに行くことはまず不可能です。

ですけれども、メキシコまでは、当時でも五、六日あれば行けたことは、間違いないような気がするわけです。

そこで日程的に考えますと、メキシコには行ったんではないか。そうするとご存じのように、メキシコには例のスペインに征服される以前のインカ文化、インカ文明があったわけです。ペルーのほうも、仮にインカ文化だということに考えますと、インカの遺跡という意味では共通していると思うんですね。ですからインカ文明時代の水道遺跡を見れば、そのインカの文化が栄えた代表的な地域として、メキシコ、ペルーなどを挙げても不思議ではない。しかもペルーは当時世界一の大銀山が栄えた所でありますので、そういう意味でも非常に著名な地域であったんじゃないかと思うわけです。

そんなことからしますと、ペルーまでは行かなかったけれども、メキシコには行った可能性があると思われれます。そういった古い文化遺跡を訪ねようというのも、先生は実は上下水道の技術者であると同

時に、当時屈指の写真家でもあったわけですから。後ろに平岡さんが展示してくださいました、東京の大パノラマ写真を見ましても、優れた写真家であったということはわかっていただけたと思うんです。そんなことで、写真家としての冒険心からメキシコまでの旅行を決行されたんじゃないかな。そんなふうに私は思いたいです。

これはあくまで思いたいということで、特にきちんとした事実関係があるわけではありません。あくまで一つの仮説ですけど、来日過程でメキシコまで行って、そしてインカ遺跡を見てからその足で日本にやって来た。ですから私が想像しましたように、五月二十日頃には日本に来て、少しゆったりしたんじゃないかというような、そんなことじゃなく、もう二十六日に来てすぐに東京大学の先生を始めるという、非常に忙しいスケジュールだったのじゃないかなというように思えるわけでございます。一方で、太平洋横断にも二十一日かかったというのは、やっぱりこれも五、六日長いような気がする

んです。そうすると船の名前が、なにしろシェイパー・オブ・シドニー号ですから、真っ直ぐ横浜へ向かったのか、それともアメリカ側の太平洋沿岸都市を経由しながら来たのか。それとも途中ハワイに寄って、ハワイで少し遊んで来たのか。どうも直接太平洋をそのまま渡ったのじゃないように思えます。そうすると、途中で寄港しながら来るということになると、途中でメキシコに寄ることもできるという気もします。このあたりはそういう可能性もあるような気がするんです。

いずれにしても、先程お見せしました新聞の僅かな字数ですね。たった三行か四行の字数ですけど、今申しあげたようなこと、仮説がここに想定されるんですね。そんなことを一つの例としますと、いっぱいそういう問題が、バルトン先生にはございますので、これはやはり、いつの日かスコットランドに行って調べないといかんというような気持ちでおります。

それから最後に、島海たへ子さんという方が、バ

ルトン先生の孫に当たられるわけですよ。

このたへ子さんが、自分のお母さんであるたまさんだとか、それから実はバルトン先生が亡くなられた後、たまさんたちは、取り残されたわけですね。そのときにベルツ花という、例の有名な医師でありましたベルツ博士の奥さん、ベルツ花のたいへんなお世話を受けたそうです。このベルツ花さんから聞いたいろんなバルトン先生の思い出を、ここに持ってきたんですけれども、こんな小さなノートに書かれているんです。たへ子さんは、亡くなられてもう二年ぐらい経ちますけれども、こういう手記を残されていたわけです。僕たちの研究会では、こういう資料をご遺族の鳥海幸子さんからご提供いただきまして、『下水文化叢書』の第二巻として整理した上で発刊し、会員の皆様にお届けしようと考えております。

この中には、ともかく遺族でないとわからないような、バルトン先生を巡る、あるいはバルトン先生亡き後の遺族の方々の苦勞と言いましょ、波瀾

に満ちた生活と言いましょ、そういったことが書かれてありますから、非常に興味深い貴重な資料だと思います。

それからあとちょっと余談ということで、この鳥海家の家系についてこの際ですからお話します。鳥海家は、今NHKで日曜の夜やっております「炎立つ」ですね、あれと非常に深い関わりがあるんですね。鳥海家というのは、ご存じの山形県の鳥海山ですね。山岳信仰の中心の一つですが、あの地域を領有して栄えた鳥海三郎という豪族をその祖としているわけです。既に千年に近い、由緒ある名家と聞いております。

鳥海三郎という人はどういう人物かと申しますと、例の前九年の役に敗れた安倍貞任の弟、安倍宗任が、一名鳥海三郎なんです。安倍貞任は有名で、岩手の盛岡には前九年なんていう地名もあります。その弟である安倍宗任は、山形の山岳信仰の中心の、あの地域を領有して栄えていたわけです。

その家系から明治時代になりますと、初代の帝国

議会の国会議員が出たり、あるいはまた著名なジャーナリストが出ています。「炎立つ」をご覧になるときは、このようなことを思い出しながら見ていただいたら、一層興味深いのではないかと思います。それではこれで話を終わらせていただきます。

(拍手)

